事後評価報告書（実行団体用）

１．基本情報
１-１）実行団体名：特定非営利活動法人東京里山開拓団
１-２）実行団体事業名：児童養護施設との里山開拓活動とそれを支える企業向け里山研修事業
１-３）資金分配団体名：特定非営利活動法人まちぽっと
１-４）資金分配団体事業名：市民社会強化活動支援事業（Pecs）
１-５）事業の種類：草の根活動支援事業
１-６）実施期間：2020 年 4 月から 2023 年 3 月
１-７）事業対象地域：八王子市など

2.事業概要
２-１事業計画と結果
２-１-１）優先的に解決すべき社会の諸課題
① 領域：1) 子ども及び若者の支援に係る活動
② 分野：①経済的困窮など、家庭内に課題を抱える子どもの支援
③ 直接的対象グループ：児童養護施設、荒れた山林、研修参加企業
④ 間接的対象グループ：児童養護施設退所者

２-１-２）事業の背景・課題
〇社会的課題
国土の 7 割を占める山林は、戦後生活様式の変化、不動産バブルと崩壊、過疎化・高齢化、林業不況などで多くが荒れたまま放置され、獣害、花粉症、土砂災害、未登記、不法投棄などの課題を抱えている。
また、児童虐待、育児放棄、精神疾患、経済的貧困などから親元を離れ児童養護施設で暮らす子は全国で 3 万人おり、増加する依頼への対応、心のケア、退所後の自立支援など課題も多く残されている。
〇課題に対する行政等による既存の取組み状況
林野行政は林業の存続を支援し続けてきたが、今も自立のめどは立っていない。森林療法への保険適用まで進む欧州の例と比較すると、日本の山林の多目的活用は縦割り行政のなかでかなり遅れた状況にある。
また、児童福祉行政は今もハコモノ整備が中心で、子どもの心のケアや施設を出てからの自立支援は十分でなく、厳しい財政事情から施設養護から里親制度への移行といった民間丸投げ施策も目立つ状況にある。

《中長期アウトカム》
日本の林野行政は林業の存続を補助し続けてきたが、今も将来のめどは立っていない。

欧州では森林療法への保険適用まで進んでいるのと比較すると、山林の多目的活用は縦割り行政のなかでかなり遅れた状況にある。また、児童福祉行政は今もハコモノ整備・業者委託が中心で、子どもの心のケアや施設を出てからの自立支援は行き届かず、厳しい財政事情から施設養護から里親制度への移行といった民間丸投げも目立つ状況にある。

本活動は、都市周辺の荒れた山林において、自然とボランティアのチカラをフルに活用しながら児童養護施設の子どもたちがふるさとをみずから作り上げそれを企業が里山研修事業参加を通じて支えるモデルケースをつくることによって、公的助成や民間寄付に依存することなく社会課題が自立的に解消されていく社会づくりを目指すものである。

２-２本助成事業終了後の事業活動（出口戦略）

本事業は、現在５つの児童養護施設、２つの里山、１つの里山付き別荘まで拡げられ、また、企業とのご縁で里山研修や寄付も拡がって、今後も継続できる運営基盤を生み出すことができた。これを一つの社会貢献モデルとして位置づけ、全国の 700 の児童養護施設、国土の３割とも言われる荒れた山林で関係者の共感が得られるところに横展開していくことを目指す。

３．事後評価計画・実施概要

３-１事後評価計画

《評価項目・評価小項目》

〇アウトカムの達成度

事業を通して最終的に達成したい目標や中間的なアウトカムは達成されたか。

〇波及効果：

対象とする地域や分野等を超えて、同様の手法による取り組みは波及しそうか。

〇事業の効率性：

類似事業と比較してアウトプットはインプットに見合ったものか。

３-２事後評価実施概要

３-２-１）評価ポイントの設定・実施（どのような変化をこの事業の重要なポイントとして設定し評価を実施したのか）

〇　アウトカムの達成度

児童養護施設長へのインタビュー、会員へのアンケートを通じて、目指すところや本活動の満足度を確認する。特に今後も活動を継続したいという意志をどこまで持っているかが評価ポイント。

〇　波及効果

児童養護施設長へのインタビュー、会員へのアンケートを通じて、本活動の課題を確認する。特にその課題を克服可能と認識しているかが評価ポイント。

〇　事業の効率性

３年間のインプットとアウトプットをまとめ、児童養護施設長へのヒアリング、児童養護施設との里山開拓に参加した会員へのアンケートを踏まえて、事業の効率性を自己評価

する。

3-2-2）実施した調査（どのような調査を実施して測定したのか）

1）調査方法

① 児童養護施設長へのインタビュー：訪問面接調査

② 会員へのアンケート：ウェブアンケート調査

2）調査実施時期

・ ①：2022年12月28日

・ ②：2022年11月26日から12月15日

3）調査対象者

・ ①：11年間にわたって活動を続けてきた児童養護施設の施設長

・ ②：11月の児童養護施設との里山開拓に参加した会員6名

4）分析方法

・ 調査から得られた意見、感想のなかから評価項目に関連するところ抽出、整理、分析

3-2-3）調査結果の分析（調査結果をどのように深掘りし価値判断をしたのか）

○ アウトカムの達成度

【児童養護施設長インタビュー抜粋】

・ 東京でいかに子どもと豊かな時間を創るか、その術を見つけ出すのに苦慮していました。ゲームが暮らしの真ん中に定着し、子どもの遊び相手が人から機械に取って代わろうという状況にあって、堀崎さんからの提案は、機恵子寮にとって願ったり叶ったりのものでした。

・ （こどもたちにとって火を使うことは）やった事のない事をやったというワクワク感があった

・ 開拓団に集まる人々との繋がりは、子どもの支援をしてもらうということでの繋がりというよりは、一社会人としての繋がり・関わりをもらえる場所だと感じています。

・ ハンモックに揺られながら施設の職員とも子どもたちとも色々な話をしたいですね。そして将来的には今里山へ通っている子どもたちが親になって子どもを連れてくるまで見届けたいですね。少なくとも十年位はかかるかな。

【会員アンケート抜粋】

・ 里山でやっていることは、何か特別なことではなく、食べる、遊ぶ、作業する、休むなどごくごく普通のこと。でも困りごとに失敗をおそれずチャレンジしてみることによって、そこに楽しさを見い出せるようになり、結果として人生が心豊かなものになっていきます。

・ 直前の雨で焚火起こしには苦労しましたが、頑張って火を起こして作った料理は一層おいしく感じました

⇒考察）児童養護施設長へのインタビューと会員アンケートから、里山開拓に都会では得られない大きな価値を感じていて、今後も長く活動を継続していきたいという意志を確認できました。よって、アウトカムの達成度は「十分に達成」と評価しました。

○　波及効果

【児童養護施設長インタビュー抜粋】

・　児童養護施設は「最後の受け皿」と位置付けられていてもし施設に適応できないと児童は行き場がなくなってしまう。さとごろりんはそんな児童にとってのセーフティネットとしての可能性を感じる

・　施設の子どもたちは「親はどうなっていくのだろう？」とか「僕はどうやって生きていけばよいのだろう？」と困っている。子供がそこまで考えなくてもいいのに、と思う位、不健康に困っている。（でも里山では）今この瞬間、「目の前の木が切れない」とか、「火がつかない」という困りごとに向き合って「どうしよう？」と試行錯誤することで「できた！」が生まれる。そういった試行錯誤の連続が里山だと思います。

【会員アンケート抜粋】

・　開拓団には、もっとやれることがたくさんあると思っています。依然として荒れた山林は日本中にあり、それを変える一つのモデルケースになっていけるのではと考えています。ただ、それを実現するために必要なことがあって、開拓団の会員の皆さんにはもっともっと里山へ通い続けて、里山に楽しみや価値を自分で見出してもらいたいと思っています。

・　開拓団では、絵本作家のかこさとしさんから頂いた『よりたくましく、よりすこやかに』という言葉を大切にしています。色々と困ることに直面したり、試行錯誤したりしながら、自分の持っていた生きるチカラに気づけるのではないかと思っています。

⇒考察）児童養護施設長のインタビューからは現行制度上の課題克服として本事業に期待いただいていることが確認できました。これは児童養護施設共通の課題とも考えられます。また、会員のインタビューからはリードする人材確保という課題を抱えながらも克服できるものととらえていました。よって、波及効果は「十分に期待できる」と評価しました。

○　事業の効率性

①　インプットの適切性検証

・　コロナ禍への対応として活動計画の変更（児童養護施設のための里山付き別荘リニューアル追加※予算枠内）をしたところがあり、承認の上支出。里山開拓作業は無償ボランティアによる手作業の運営方針を崩さず支出は最小限に抑制。目的外の支出、過大な支出、遊休状態のインプットはない。助成金確保、積立取崩しにより自己資金割合は計画通り実現。

②　量的・質的に重要性の高いインプットの特定

・　里山付き別荘リニューアルにかかる材料費・備品費・交通費

・　里山開拓にかかる備品費・食材費・交通費

・　里山研修事業立上げおよび本助成金事務作業にかかる人件費

③　アウトプット・アウトカムとインプットとの関係性検証

・　上記インプットにより実現した里山付き別荘はコロナ過でも児童養護施設単独で里山ライフを体験できる所として活用が進んでいる。

・　上記インプットにより実現した児童養護施設との里山開拓は別途記載の通り児童福祉と環境保全の一石二鳥の大きな成果を生み続けている。

・　上記インプットにより実現した里山研修事業立ち上げは道半ばではあるが、企業とのご縁を拡げた結果として寄付による当面の財政基盤確立を実現した。また、本助成金事務手続きは適宜適切な対応を行うことができた。

⇒考察）上記の通り、都会ではお金を出してもできない体験、環境が里山とそのふもとで効率的に実現できており、事業の効率性は「十分に高い」と評価しました。

３-３実施体制（内部/外部、評価担当役割、氏名、団体・役職）

《計画時》

・　東京里山開拓団・会員

《事後評価実施時》

・　東京里山開拓団・堀崎（代表）、高井（総務）、奥村（学生支部代表）

４．事業の実績

４-１インプットの計画と実績

４-１-１）資金

①　事業費（自己資金含む）　7,500,000円

＊内訳〔直接事業費〕　5,520,600円/〔管理的経費〕1,979,400円

②　評価関連経費（計画時）3,000円/（実績額）０円（ご記入時点での額でご記入ください）

③　コロナ対策緊急支援追加額　　０円

④　助成額（計画時合計額）6,000,000円

⑤　助成額（実績合計額）4,007,709円（ご記入時点での額でご記入ください）

⑥　自己資金の種類と金額（計画時額）

・　種類：助成金＝2020年度：300,000円/2021年度 300,000円/2022年 253,000円

・　種類：会費＝2020年度：90,000円/2021年度 100,000円/2022年度 100,000円

・　種類：寄付または積立取崩＝2020年度：103,700円/2021年度 83,300円/2022年度 170,000円

⑦　自己資金の種類と金額（実績額）

・　種類：助成金＝2020年度：０円/2021年度 ０円/2022年 300,000円

・　種類：会費＝2020年度：０円/2021年度 ０円/2022年度 ０円

・　種類：寄付または積立取崩＝2020年度：０円/2021年度 ０円/2022年度 254,780円

⑧ 自己資金の調達で工夫した点など（自由記述）：

・ 助成金、積立取崩しより充当

4-1-2）人材

① 計画時：

・ 内部：合計50人（本部会員20人、学生支部30人）

・ 外部：合計2人（ボランティア団体・星の子キッズ）

※人件費は里山研修事業立上げおよび事務管理作業のみに充当し、里山開拓作業には充当せず（無償ボランティア）

② 実 績：

・ 内部：合計60人（本部会員40人、学生支部20人）

・ 外部：合計4人（ボランティア団体・星の子キッズ）

※人件費は里山研修事業立上げおよび事務管理作業のみに充当し、里山開拓作業には充当せず（無償ボランティア）

4-1-3）資機材（事業で購入した高額の資機材の主要なものを記載してください）

① 計画時： ロープ、テープ、シート、なた、のこぎりなど

② 実 績： 空家リフォーム費、備品費、ロープ、なた、のこぎり、カメラなど

4-2活動とアウトプットの計画と実績

4-2-1）主な活動の計画と実績

《アウトプット（計画時：概要、指標、初期値/初期状態、目標値／目標状態、目標達成時期、実績値）》

アウトプット	指標	目標値	達成時期	現在の指標の達成状況	進捗状況＊
1.東京周辺の荒れた山林の整備	里山開拓実施回数	45	2023年3月	108回※別荘整備含む	1
2.児童養護施設との里山開拓の実施	児童養護施設との里山開拓実施回数	30	2023年3月	28回※別荘利用含む	2
3.企業向け里山研修事業の実施	実施回数	16	2023年3月	8回※予定6回含む	3

《主な活動における実績》

① 東京周辺の荒れた山林の整備

二つ目の里山や空き家を確保し、会員による里山開拓、里山付き別荘整備回数は想定

より大幅に増やすことができ、目標を過達。

② 児童養護施設との里山開拓の実施

コロナ緊急事態宣言等により当初は計画より大幅に遅延していたが、児童養護施設側からの実施要望は強く、連携する児童養護施設は２つから５つに拡大。さらに、児童養護施設単独で里山ライフが実現できる里山付き別荘「さとごろりん菅生」を 2021 年 7 月に開設（空き家を短期・低予算の素人 DIY でリフォーム）。結果として、コロナ対策の上での里山開拓実施、施設単独での里山付き別荘利用によりほぼ目標を達成。

③ 企業向け里山研修事業の実施

企業への提案、展示会 PR などを重ねたものの、コロナ禍当初は企業の反応は鈍く、目標 16 回に対し、実施済 2 回・今後実施予定 6 回（寄付を受領した RGA）の合計 8 回にとどまった。しかし、企業への働きかけの結果として、金融機関や関連団体からの大型寄付が決定し、今後 3 年間以上継続可能な収益基盤強化を実現。

４－３　外部との連携・協力などの実績

・ 2020 年度：ボランティア団体・星の子キッズ、当団体学生支部エンペンタスとの連携で星美ホームとの里山開拓開始。環境大臣よりグッドライフアワード環境大臣賞最優秀賞表彰。
・ 2021 年度：NPO 法人ふるさとの森づくりセンターと連携して、児童養護施設のための里山付き別荘リニューアルオープンを実現。環境省が環境白書にて当団体紹介。
・ 2022 年度：再保険大手 RGA より寄付決定、今後社員向けに里山研修を実施予定。FIT for Charity Run より寄付決定。環境省が当団体紹介動画制作、審議会で紹介。

４－４成果の分析（アウトカムの達成度と分析）

４－４－１）短期アウトカムの計画（計画時：概要、指標、初期値/初期状態、目標値／目標状態、目標達成時期）》

（2）短期アウトカム	指標	初期値/初期状態	目標値／目標状態	目標達成時期
1.東京周辺の荒れた山林において、里山として維持保全された状態となる	社会的に活用可能な山林の広さ	1.5ha	3.0ha	2023 年 3 月
2.東京周辺の荒れた山林において、児童養護施設の子どもたちがみずからふるさとを創り出している状態となる	里山に通いたいと感じる子どもたちの人数	15 人	30 人	2023 年 3 月
3.東京周辺の荒れた山林において、企業が里山研修に参加することで、東京里山開拓団の自立運営を支えている状態	自主事業収益-NPO 運営費	-50 万円	0 円	2023 年 3 月

４－４－２）短期アウトカムの達成度（実績：概要、実績値、要因、課題など）

① 八王子の里山 1.5ha は維持保全状態。2022 年夏より着手したあきる野の里山 1.5ha は作業着手済み。目標をほぼ達成。

② 里山に通う児童養護施設の子どもたちは当初 2 施設から 15 人程度だったが、5 施設から 40 人程度に拡大。目標を過達。

③ 企業からの里山研修予定に加えて寄付により、今後 3 年間の NPO 運営費捻出に目途。目標を過達。

4-4-3）アウトカム達成度についての評価（複数の短期アウトカムの達成度を総合的に見て（中長期アウトカム・今後の活動に向けた展望など含む））

短期的に目標としていた、里山の確保は実現し、児童養護施設からの参加は増え、中期的な財政基盤も予定通り実現した。今後は里山開拓を継続してリードできる人材の確保、育成に注力して本活動の横展開を加速したい。

4-4-4）波及効果（想定外、波及的・副次的効果など）

- 開設したさとごろりん菅生は、児童養護施設の休暇の滞在場所としてだけでなく、児童養護施設になじめなくて行き場を失っていた児童の一時避難場所として数週間にわたって活用するケースが出てきており、職員からは現行制度の足りていないところを補完する役割を期待されている。
- 環境大臣賞表彰以降、マスメディアの紹介や講演の依頼が増加し、会員は 40 名にまで急増。学生支部エンペンタス 20 名、里山紹介サイト「日本ノ里山ヲ鳥瞰スル」運営の里山ネット調査隊 30 名も加えると、参加者合計 90 名にまで拡大。
- 10 年以上にわたって児童養護施設の子どもたちと保全を続けた八王子の里山では、2021 年にトキやヤンバルクイナより数の少ない絶滅危惧種のミゾゴイが発見され、関係者の注目を集めるとともに改めて本活動の里山保全上の価値が確認できた。

４－４－5）効率性の向上

本助成からの人件費は研修事業立上げおよび事務作業のみにとどめ、メイン活動の里山開拓作業は無償のボランティア運営を継続したことにより、助成終了後も固定費を抱えずに、ボランティア活動の直接経費に多くを充当できる効率的な運営体制を確立。荒れた山林対策、児童の虐待貧困領域における他の行政・業者などの取組みに比べ、大幅に少ない予算で一石二鳥の大きな成果を生んでいる。

５．成功要因・課題

企業にも行政にもできないボランティアならではの社会貢献活動のあり方を考え続け、新たな活動や運営に向けた試行錯誤を続け、参加者や関係者に意識向上を働きかけ続けてきた結果として、本活動の成果を生むことができた。課題としては、活動の横展開に向けて同じ意識をもって継続して取り組む仲間づくりをさらに進める必要がある。

６．「つながり」の強化

・　助成団体とのつながりについて、まちぽっと事務局の配慮と助成先団体からの紹介でご縁が拡がり、あきる野市菅生での里山確保や里山付き別荘のための空き家確保が実現できた。

・　企業とのつながりについては、里山研修提案の働きかけによって、結果として寄付の確保を促した。

・　行政とのつながりについては、環境大臣賞表彰が一定の信用となって、結果として会員や連携先企業の拡大を促した。

７．結論

・事業実施のプロセスおよび事業成果の達成度について自己評価の結果として記載してください。

７－１事業実施のプロセスおよび事業成果の達成度の自己評価

・（１）、（２）それぞれ１箇所を選択し、○をご記入ください。

	多くの改善の余地がある	想定した水準までに少し改善点がある	想定した水準にあるが一部改善点がある	想定した水準にある	想定した水準以上にある
（１）事業実施プロセス				○	
（２）事業成果の達成度					○

７－２事業実施の妥当性

荒れた山林を児童養護施設の子どもたちと伐り拓いてふるさとづくりは、多くの児童養護施設職員と子どもたちが夢中になり、環境大臣や環境省職員も評価して表彰や環境白書掲載や審議会紹介するほどの成果を生んでいる。また、それを支える研修事業についても、企業との連携により中期的に活動が継続できる財政基盤が確立できた。さらに本事業実施により、全国にあふれる荒れた山林の問題、拡大する児童の虐待貧困の問題について、ひとつの社会課題克服のモデルを作ることができたと考える。

８．提言

まずは、現在の関係者が５つの児童養護施設、２つの里山、１つの里山付き別荘での実績を、継続して成果を生み続けられるひとつの社会課題克服のモデルとして、十分に理解を深める必要がある。そして、さらなる関係者の拡大、本活動の理解促進、参加意識の向上、信頼関係づくりに向けた働きかけが不可欠である。児童養護施設職員・子どもたち、会員、サポーター、連携する企業や団体、地主・家主、地域関係者、行政関係者、マスメディア関係者とのさらなる対話を重ね、よりよい活動のあり方をさらに試行錯誤していきたい。

９．知見・教訓

荒れた山林だけでなく、ふもとの空き家まで活動エリアを拡げることで、天候・季節に左右されない運営、児童養護施設による単独実施、地元との連携強化に加えて、さらに深い里山ライフの実践と児童養護への貢献が可能となった。

また、助成金・補助金とのかかわりについていえば、お金は社会貢献活動を大きく加速させる力をもつ一方で、関わる人の心を惑わし本来の社会貢献活動のあり方を見失わせる力ももつ。助成金･補助金依存となって本来なすべきことを見失ってしまうことのないよう、これからもボランティア意識を高く持ち続けて活動を継続運営していきたい。

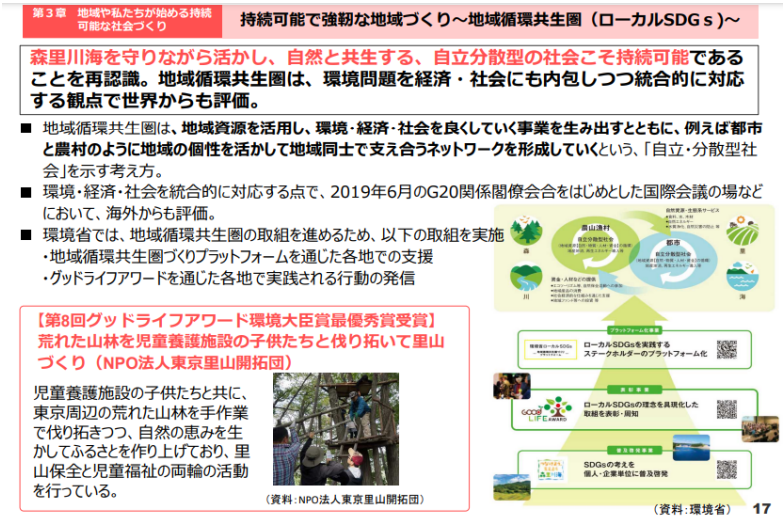
10. 資料（別添）

八王子の里山にツリーハウス建設中

荒れた山林に新たな道を伐り拓く

八王子の里山で撮影した絶滅危惧種ミゾゴイ

空き家を素人 DIY リフォームした児童養護施設のための里山付き別荘さとごろりん菅生



第３章　地域や私たちが始める持続可能な社会づくり

持続可能で強靭な地域づくり～地域循環共生圏（ローカルSDGｓ）～

森里川海を守りながら活かし、自然と共生する、自立分散型の社会こそ持続可能であることを再認識。地域循環共生圏は、環境問題を経済・社会にも内包しつつ統合的に対応する観点で世界からも評価。

- 地域循環共生圏は、**地域資源を活用し、環境・経済・社会を良くしていく事業を生み出すとともに、例えば都市と農村のように地域の個性を活かして地域同士で支え合うネットワークを形成していく**という、「自立・分散型社会」を示す考え方。
- 環境・経済・社会を統合的に対応する点で、2019年6月のG20関係閣僚会合をはじめとした国際会議の場などにおいて、海外からも評価。
- 環境省では、地域循環共生圏の取組を進めるため、以下の取組を実施
  - ・地域循環共生圏づくりプラットフォームを通じた各地での支援
  - ・グッドライフアワードを通じた各地で実践される行動の発信

【第8回グッドライフアワード環境大臣賞最優秀賞受賞】
荒れた山林を児童養護施設の子供たちと伐り拓いて里山づくり（NPO法人東京里山開拓団）

児童養護施設の子供たちと共に、東京周辺の荒れた山林を手作業で伐り拓きつつ、自然の恵みを生かしてふるさとを作り上げており、里山保全と児童福祉の両輪の活動を行っている。

（資料：NPO法人東京里山開拓団）

（資料：環境省）　17

令和３年度環境白書で紹介